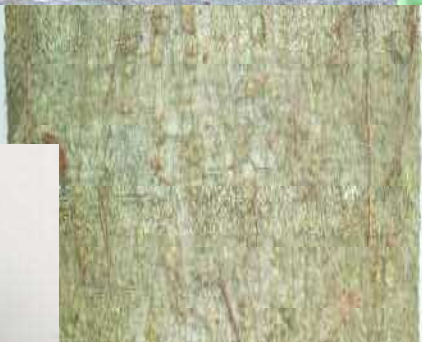
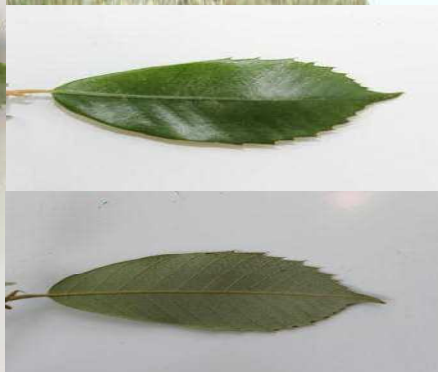
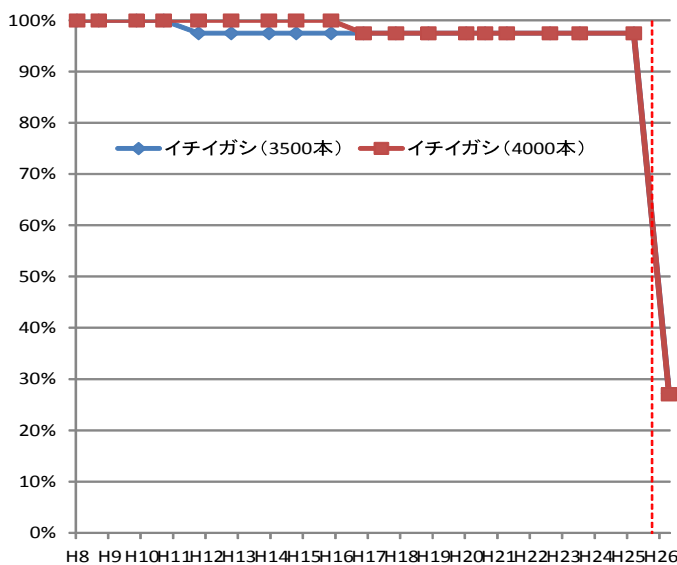


樹種名	イチイガシ	
科 目	ブナ科	
学 名	<i>Quercus gilva</i>	
分 布	本州（関東以西の太平洋側）、四国、九州、国外では済州島、台湾、中国に分布する。	
樹木特性	半陰樹であり、日照を好むが陰地・乾地でも育つ。低地の肥えた土地に生育する。さらに耐陰性が強く薄暗い林内でも稚樹が発生する。当展示林でも本数調整伐したものから薄暗い中で萌芽が発生する。	
用 途	材は柾目の虎斑がみごとで器具・建築材に利用。昔は材の強靱を活かして舟の櫓に用いた。 公園樹としても利用。	  
植栽本数/面積 （植栽密度）	772 本／ 0.20ha (3500 本・4,000 本／ ha)	
特 徴	【樹 形】 常緑高木であり大きいものは高さ 30m に達する。樹皮は黒っぽい灰色、非揃いに剥がれ落ちる。葉は倒非針形から広倒非針形、先端が急に尖り、縁は半ばから先端にかけて鋭い鋸歯が並ぶ。葉はやや硬く、若いうちはその表面に細かい毛を密生、後に無毛となり深緑になる。また、裏面は一面に黄褐色の星状毛を密布する。雌雄同株で 4 月から 5 月頃に開花する。材は弾力性があり加工しやすく形質も良好で柾目の虎斑がみごとである。	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、病虫獣害は少ないものの、現存率は 27 % の結果であった。 植栽から 18 年を経過した平均樹高は 13m 程度と成長状況は非常に良好であり、幹の曲がりも少なく通直性に優れている。 林況が過密状態になり劣勢木を本数調整伐を行ったが、1 年後にはうっぺい状態に戻っている状況である。 周囲の国有林にも多くの自生木が見られることから適地と考えられる。	
被 害	特になし。	

イチイガシ 現存率



【現存率】

選定した調査木の現存率は比較的高く安定している。

林内の照度調整を図るため平成15年、16年、17年、20年、21年、24年度にわたり6回の本数調整伐を実施した。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は27.2%であった。

さらに、当試験地には自生したイチイガシが3本現存している。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

4,000本/haと3,500本/haともに同程度の成長である。

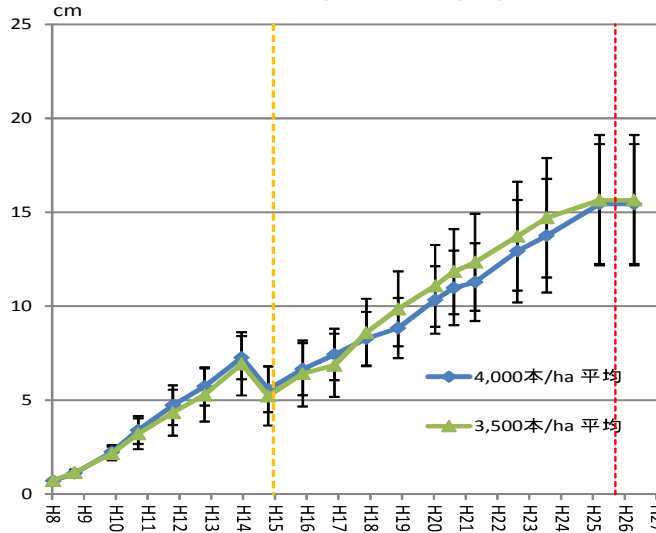
平成26年度に毎木調査を実施した結果、3,500本/haの平均胸高直径は15.65cmであり、4,000本/haの平均胸高直径は15.44cmであった。

さらに、自生しているイチイガシ(3本)の平均胸高直径は11.64cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

イチイガシ 根元・胸高直径



【樹高】

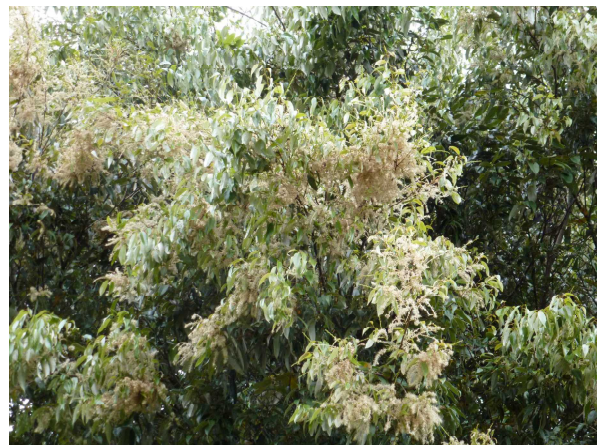
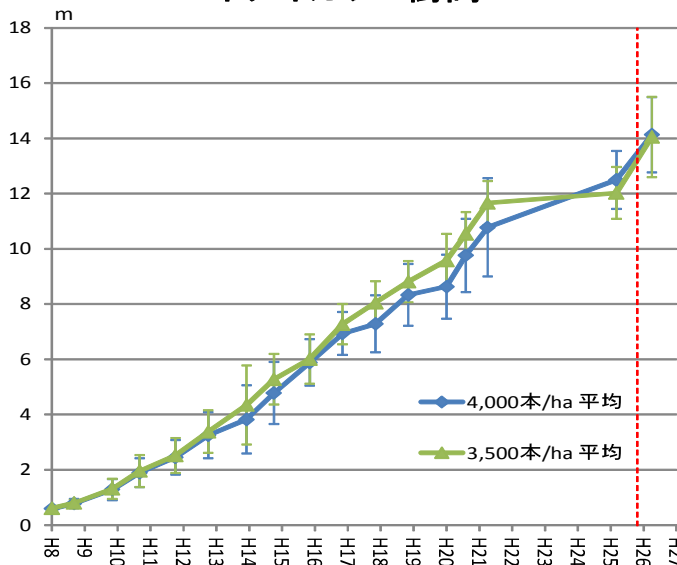
4,000本/haと3,500本/haともに同程度の成長である。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、3,500本/haの平均樹高は14.05mであり、4,000本/haの平均樹高は14.13mであった。

さらに、自生しているイチイガシ(3本)の平均樹高は8.93mと植栽木と比較して、低い状況であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

イチイガシ 樹高



《プチ情報》

カシ類では例外的に、タンニン（渋み）が少なく果実をあく抜きせずに食べることができる。